

遺伝子組換え作物(GM作物)については賛否あります。日本では作られていませんが、輸入品として食べざるを得ないというのが実情です。

GM作物の商業栽培は1996年、アメリカなど4カ国、170万ヘクタールで始まりました。2002年には16カ国、35倍の5870万ヘクタールに伸びています。作付け面積でアメリカが66%、アルゼンチン23%、カナダ6%、中国3.5%と、この4カ国でほぼ99%を占めています。そしてインドやコロンビア、ホンジュラス、スペイン、ドイツなどでも栽培するようになりました。作物の種類としては大豆が61%、トウモロコシ20%、綿12%、ナタネ5%です。GM大豆は世界の大豆全体の51%にのびます。これをみる限り、いいとか悪いとかに関係なく、また消費者の意識とも関係なく、世界の食料の中にしっかり浸透していることがわかります。このように作付面積が伸びたのは、特にアメリカの農業事情が原因です。これまでアメリカの大規模農業では農薬、化学肥料の大量使用で土壌が荒れ、作物が育たなくなり、環境問題としても深刻な状態がありました。畑を耕さなくてもすむ不耕起栽培に適し、農薬が少なくすむといわれるGM作物を作らざるを得ないという事情があるわけです。実際、遺伝子組換えによって大豆で10~15%、綿で約30%の農薬を減量、経費が削減できたのです。

国際ルールもでき、CODEX委員会(国際食品規格委員会)は国連食料農業機関と世界保健機関が合同で設立した機関ですが、ここでGM作物のガイドラインを採

択しています。また生物の多様性を確保し、環境への悪影響を防ぐために遺伝子組換え生物などを利用する場合の国際ルールはカルタヘナ議定書として決められています。輸出入にあたって環境への影響を配慮してリスク評価を行わなければなりません。2004年で87カ国が批准しています。

GM作物については、既成事実先行の状態ですが、容認派と拒否派との間で合意ができたわけではありません。

賛成意見としては

- ・世界的に厳しい評価システムにのっとなってチェックしているので安全だ
 - ・100%の安全食品などないのだから、食べる量や栄養を考えれば危険性より有益性のほうが大きい。
 - ・食糧危機の切り札となる
 - ・環境保全型の農業ができる(農薬や肥料の減量など)
- などとしていて、世界的な農地不足、水不足をにらんで食料増産のための切り札だということを主張します。

一方、反対意見では

- ・消費者のメリットがない
- ・アレルギーや毒性などの安全性に問題がある
- ・自然種との混雑で自然体系に悪影響がおこる可能性がある
- ・現在の遺伝子組換え技術は不安定で、予期できない毒性物質が産生される可能性がある
- ・殺虫成分を含んだ食べ物を食べ続けるリスクや抗生物質耐

性のリスクがある

などがあげられています。消費者のメリットがないという点については、イヤなら食べなければ良い、という論法がなりたないところに問題があります。大豆、トウモロコシ、じゃがいも、なたね、綿実など、5種類の遺伝子組換え食品、その加工品は表示義務がありますが、加工後にそのDNAが含まれていなければ、表示義務はありません。つまり醤油や食用油などは原料に使われていても表示しなくてもよいこととなります。アメリカからの大豆輸入が圧倒的に多いのに、組換え商品と表示しないというのは、消費者の選択を考慮しているとはいえません。また家畜の飼料もGM作物が圧倒的に多いのです。

確かにGM作物は当面の農薬減量に成功していて、収穫量も満足なものかもしれません。しかし、それが世界の食料危機を救うことができるかという疑問です。というのも、これらの作物は特定のタネを植え付けるたびに購入しなければならず、害虫抵抗性があるといっても、そのタネと同時に特定の農薬とセット販売されています。第三世界の農民がこれらを購入できるとは考えられません。特許の問題がありますから、作物を作り、その実の一部を次の生産にまわすという持続可能な農業からは遠く離れた農業でしかありません。米国モンサント社の独占といえます。